麻薬探知犬ハンドラーの教授学習過程の考察 (2)

ハンドリング／麻薬探知犬観の探索的分析

○梅崎高行¹

(¹ 甲南女子大学人間科学部)

キーワード：麻薬探知犬，ハンドラー，ハンドリング／麻薬探知犬観

A study of teaching-learning process of the handler (2)

Takayuki UMEZAKI¹

(¹ Faculty of Human Sciences, Konan Women's University)

Key Words: drug detector dog, handler, perspective of handling/drug detector dog

目 的

不正薬物の流入を防ぐ上で、麻薬探知犬（以下、麻犬）が果たす役割は大きい。近年では、適性に見極めに動物遺伝学の知見も活用され（今野・長谷川・村山，2014；村山，2012），洗練された訓練とあいまって、配備される麻犬の質向上が期待されている（村山，2015）。ただし不正薬物の摘発は、麻犬単独ではなし得ない。ハンドラーと呼ばれる税関職員との協働によって、はじめて達成されるものである（税関 HP）。にもかかわらず、社会悪を対象とした専門職であるがゆえの機密性から、ハンドラーの成長に着目した心理学的研究が必ずしも盛んであったわけではなかった（梅崎，印刷中）。このような背景から新たにハンドラーの教授学習過程を取り上げ、分析することで、国民の健全な社会生活に対する寄与を目指す。本研究では、職務に影響すると考えられるハンドラーの信念（ハンドリング／麻薬探知犬観）について検討する。

方 法

国内 A 税関管理官（男性，50 代）に依頼し、ハンドリング／麻薬探知犬観を把握する上でふさわしいと考えられる質問 13 項目を用意した。これをスケールとし、関係者の協力によって国内外の税関で実施・回収された。期間は 2015 年 4～5 月であった。海外調査に際しては、ネイティブ税関関係者によるバックトランスレーションを受けたスケールが使用された（Figure 1 参照）。最終的に 5（国内 4，海外 1）税関、合計 64 名の職員から回答を得た。

結 果

全 13 項目に対し、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。負荷量が 4 未満かつ二重負荷を示した項目を除外しながら分析を繰り返し、最終的に得られたパターンを Table 1 に示した。各尺度の Cronbach の α 係数は .29 から .63 であり、内的整合性が十分とは言えない。このことを課題としつつ、得られた 3 因子に命名し、税関毎の得点差を算出した。すると「犬側の視点」因子において有意差が確認された ($F(4, 59)=5.04, p<.001$, Table 2)。Bonferroni 法による多重比較の結果、海外 E 税関 9 名に比べ、国内 B 税関 6 名 ($p<.002$)・C 税関 30 名 ($p<.008$) において、犬の気持ちを尊重する（麻犬は生物、リトリブは遊びと見なす）傾向が強かった。

Table 1. ハンドリング観／麻薬探知犬観スケールの探索的因子分析結果（最尤法分析・プロマックス回転）

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F1</i>	<i>F2</i>	<i>F3</i>	<i>h²</i>
ハンドリング技術向上観						
11 ハンドリング技術は...セシスの賜物である／学習の成果である	2.66	5.21	-.76	.19	-.32	.71
12 探知に役立つのは...経験である／常識である	0.76	5.01	.45	-.13	-.26	.49
5 どちらかと言えばハンドリングは...スポーツである／芸術である	0.75	5.82	.53	.29	-.05	.37
犬側の視点						
1 どちらかといえば麻薬探知犬は...生物である／道具である	3.80	4.59	.15	.89	-.04	.83
6 リトリブは...遊びである／訓練である	2.41	5.49	-.16	.61	.12	.38
ハンドラーと麻犬の協働性						
10 犬にとってハンドラーの命令は...絶対である／選択肢である	-.059	5.91	.09	.06	.53	.28
2 探知できればそれは...犬の力である／ハンドラーの力である	2.03	3.78	-.26	.04	.45	.26
	<i>F1</i>		(.63)	-.02	-.00	
	<i>F2</i>			(.63)	-.24	
	<i>F3</i>				(.29)	

注) 対角要素の () 内の数値は尺度の α 係数である

Table 2. 税関毎のハンドリング観／麻薬探知犬観得点の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
ハンドリング技術向上観	グループ間	269.88	4	67.47	.436	.782
	グループ内	9139.54	59	154.91		
	合計	9409.42	63			
犬側の視点	グループ間	1218.64	4	304.66	5.042	.001
	グループ内	3564.92	59	60.42		
	合計	4783.56	63			
ハンドラーと麻犬の協働性	グループ間	161.74	4	40.44	.689	.602
	グループ内	3461.89	59	58.68		
	合計	3623.63	63			

考 察

国内 4 税関において得点差が見られなかった点は、ハンドラー育成、とりわけ初期訓練が機能していることの証左と思われる。しかしハンドラーの力量に差がないとは言えず（梅崎，印刷中）、可能性として、信念と実際の職務とのズレも考えられることから、パフォーマンスに直結する信念を明らかにする研究ならびに信念を醸成する実践が求められよう。これ以前に、ハンドラー個々の判断を明らかにする目的で開発された本スケールはその目的を果たし、十分に整合された因子構造を見出すことができなかった。一致した理由が語られながら評定値は真逆といったケース（やその逆）も見られ、質的データを含めたスケール精緻が今後の課題である。

引用文献

今野晃嗣・長谷川壽一・村山美穂（2014）動物パーソナリティ研究の統合的理解：現状と展望。動物心理学研究, 64, 19-35。
村山美穂（2014）動物のパーソナリティ理解に向けて。心理学ワールド, 69, 13-16。
村山美穂（2012）イヌの性格を遺伝子から探る。動物心理学研究, 62, 91-99。
梅崎高行（印刷中）麻薬探知犬ハンドラーの教授学習過程の考察 (1) —ハンドラー・インストラクター・管理官へのインタビューから—。日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集。